

ぼむ・ぼむ通信

No. 60

生協の組合員と日本ユニセフ協会を結ぶネットワーク通信「ぼむ・ぼむ通信」は、生協組合員のボランティアグループで発行・編集をしています。生協のユニセフ活動に積極的にご活用ください。



◇シリアル緊急募金 1

シリアル危機～勃発から2年。2百万人以上の子どもたちが“失われた世代”に

◇知っとこ。ユニセフ 女子教育③ 3

◇世界の子どもたちは今 シリア緊急募金(教育) 4

◇ラオス・スタディーツアー報告～日本生協連～ 5

◇生協のユニセフ支援活動 12

*京都生協 *コープみらい

◇トピックス

* ユニセフの誕生物語 14

* もうご覧になりましたか？『東日本大震災 緊急・復興支援活動－2年レポート』 17

* 2012年度ユニセフ募金集計報告 18

ぼむ・ぼむ通信 活用のすすめ

- すべてのページをコピーしなくとも、「知っとこ。ユニセフ」や「世界の子どもたちは今」を集めて、資料としてご活用いただけます。
- ユニセフのつどいやユニセフ展、学習会の際に資料としてご活用いただけます。
- 店舗の募金箱の近くに置いて、生協のユニセフ活動を紹介する際にご活用いただけます。
- 生協の管理している文化センターなど、共用施設の雑誌コーナーなどにもご活用いただけます。
- 写真のコンテンツも充実しているので、カラーコピーでのご使用をおすすめします。



シリア緊急募金

シリア危機 ～勃発から2年。2百万人以上の子どもたちが“失われた世代”に

シリア危機の勃発から2年。紛争を原因とする大規模な人口移動、インフラの損壊、基本的サービスの欠如、そして連鎖する暴力が、シリアの全年齢層の子どもの命と生活を脅かし続けています。

戦闘が最も激しい地域では、安全な飲料水へのアクセスが3分の2に減少し、結果として皮膚病や呼吸器系の疾患が増加。教育の場である学校も、5校に1校が攻撃を受けて全壊もしくは半壊。避難所として使用されている学校もあるため、再開もままならない状況です。市街戦が起こったシリア北部のアレッポでは、子どもの出席率はわずか6%まで低下し、機能している学校でも、1クラスに100人の子どもがあふれている例もあります。

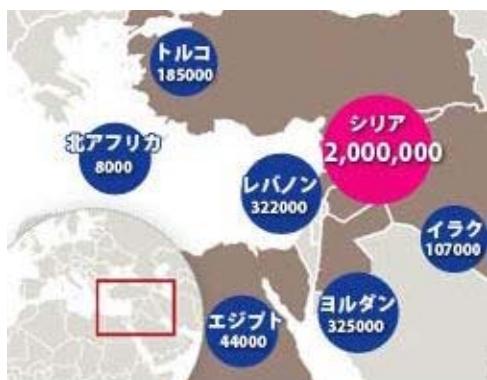


©UNICEF/NYHQ2012-0567/ALESSIO ROMENZI
紛争で破壊された家の前に立つ少年

◆ 学校は希望を与える場所

シリア南部のダラアから家族と一緒に逃れてきたバシール君(13)は、推定10万人のシリア難民が避難生活を送っているヨルダンのザータリ難民キャンプで暮らしています。最初の頃は、テント生活でしたが、今ではプレハブの居住区が提供されています。昨年10月には、キャンプ内に学校が開校し、バシール君が学校に通えなかった期間も、わずか2ヶ月にとどまりました。

「学校は好きです。いろいろ勉強できるし、英語の授業が特に好き。避難した先でも勉強が続けられてくれます。シリアに戻っても勉強は続けたいと思っています。将来、成功して医者になりたいです」と話してくれたバシール君。ユニセフの支援で運営されている、ザータリ難民キャンプの学校に登録されている子どもは、現在5,400人。学校は、教育を提供する場所であると同時に、ストレスに晒されている子どもたちに、ある程度の日常感覚を取り戻させてくれる場所でもあります。まもなく2校目が開校の予定で、3校目の建設も進められていますが、資金的に非常に厳しい状況に置かれています。



難民登録者あるいは申請者の数(2013年3月11日)

◆ 増え続ける避難民

バシール君一家のように、ヨルダンに避難を余儀なくされたシリア難民の数は増加し続けており、1日平均約2,200人と推定されています。難民の増加により、清潔な飲料水の提供や教育、保健、子どもの保護といった分野で、大きな課題に直面しています。

◆ ユニセフの支援状況

危機が始まって以来、ユニセフはパートナー団体と共に、シリア国内外に避難を余儀なくされた人々のために、飲料水やトイレの提供のほか、保健、教育、子どもの保護のそれぞれの分野での支援活動を重点的に展開してきました。

これまでのみなさまのご支援により、現在、シリア国内では 400 万人の人々が安全な飲料水を利用できるようになりました。また、150 万人の子どもに、はしかとポリオの予防接種を実施。学校や学校クラブ支援の恩恵を受けた子どもの数は、約 7 万 5,000 人にのぼります。また、ヨルダン、レバノン、イラク、トルコへの国外避難を余儀なくされた 30 万人の子どもたちにも、飲料水や衛生施設(トイレ)を提供し、教育や特別なケア、搾取や虐待からの保護といった分野での支援を行っています。

＜支援状況まとめ（シリア国内）＞

	4,000,000 人の人々が安全な飲料水を利用できるようになりました		290,000 人が毛布や赤ちゃん用の防寒服を手にしました
	333,820 人の人々が石けんと衛生キットを手にしました		32,000 人の子どもたちが心理社会的サポートを受けました
	421,700 人の子どもと女性が保健サービスへアクセスできるようになりました		75,200 人の学齢期の子どもが学習プログラムに参加しました
	14,700 人の 5 歳未満の子どもたちが微量栄養補助食品を手にしました	(シリア危機 2 年レポート(英語版)より抜粋)	

しかし、これらの活動は深刻な資金不足に直面し、ユニセフが国際社会に支援要請した半年間の目標金額の約 2 億ドルまで、まだ 30 パーセント以上足りません(2013 年 5 月時点)。

「長引く紛争による瓦礫と破壊にさらされた環境の中で、多くの子どもたちが、過去も将来の見通しも見失うような体験をしています。子どもたちが、『ロスト・ジェネレーション(失われた世代)』となってしまう危険性が高まっています」と、アンソニー・レーク事務局長は、国際社会に更なる支援を訴えています。

◆ シリア緊急募金 ◆

日本ユニセフ協会では、シリアとその周辺国に避難を余儀なくされている子どもに対して
ユニセフが行う緊急支援のためのシリア緊急募金を受け付けています。

あたたかいご支援をよろしくお願ひいたします。

郵便局(ゆうちょ銀行)募金口座

振替口座:00190-5-31000

口座名義:公益財団法人 日本ユニセフ協会

*通信欄に「シリア」と明記願います。

*送金手数料は免除されます。

ユニセフは中期事業計画（2006年－2013年）の中で
ミレニアム開発目標（2015年が期限）の達成を他の国連機関や国際社会とともに目指しています。

ユニセフ活動とミレニアム開発目標の関係

ユニセフの活動

- 1 十分なケアを乳幼児に
- 2 すべての子どもに教育を
- 3 エイズと闘う
- 4 子どもの保護を最優先に
- 5 子どもにふさわしい世界を目指して

ミレニアム開発目標（MDGs）

目標達成には



- 1 極度の貧困と飢餓の撲滅
- 2 普遍的初等教育の達成
- 3 ジェンダー平等推進と女性地位向上
- 4 乳幼児死亡率の削減
- 5 妊産婦の健康の改善
- 6 H I V / エイズ、マラリア
その他の疾病の蔓延の防止
- 7 環境の持続可能性の確保
- 8 開発のためのグローバル・パートナーシップの推進

「女子教育」がいかに大切か

ミレニアム開発目標達成のためにも、「女子教育」がいかに大切か、おわかりいただけたでしょうか。

前号で差別されている女子の状況をお伝えしましたが、世界中で約3億人の子ども達が暴力や搾取、児童労働、虐待にさらされています。

その中でも女子の環境は厳しく、児童婚、女性性器切除（FGM/C）など身体や精神に害を及ぼす習慣が今も残っているのです。

※女性性器切除（FGM/C）について

女性性器切除（=female genital mutilation/cutting、以下 FGM/C）とは、アフリカをはじめとする国々で行われている女の子や女性の性器の一部を切除してしまう慣習です。

きわめて強い社会的な規範に支えられ、家族はその害を知っていても自分の娘に FGM/C を受けさせていることが少なくありません。

FGM/C は、女子と女性の人権侵害であるとともに、健康面で長期的な影響を及ぼし、心にも深い傷を負わせています。

こちらもご覧ください。 http://www.unicef.or.jp/about_unicef/about_act04_03.html

Children First！ 改めてこの言葉を思います。子どもの保護を最優先に。

1人でも多くの女の子が子どもらしく、学校で学べることを願って、この「女子教育」のシリーズを終えたいと思います。



世界の子どもたちは今

シリア緊急募金

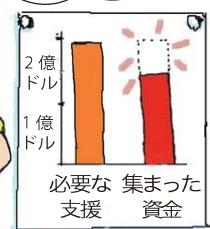
[教育]



ユニセフは国際社会に支援を呼び掛けてきたんだけれど、目標額には達していないんだ。

まだまだ足りてないんだね！

内戦はまだ続いているし、これからもっと支援が必要になるね。



ユニセフは、どんなにきびしくても休むことなく、命がけで活動を続けてるんだよ。今回は、子どもたちが学校へ通えるように、どんな支援をしているか調べてみよう！

学校まで攻撃！

5校に1校が攻撃を受けて全半壊。



危ないから行っちゃダメ！



銃声や戦闘の光景を思い出し、恐怖に震える。



家族や友人の死を目撃したことによるトラウマがある。

安全な場所にテントや仮校舎の設置



残った学校も避難所となり、授業が出来ない。

学校



保護

カウンセラーの派遣



学用品の配布

教員の派遣・研修

多くの先生が亡くなり、教員の数が足りない。



先生

職員

親

教育方法や手法などの研修

遊び場・子どもにやさしい空間



定員オーバー
2交代制で授業を行う

フランス語

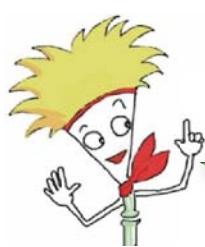
補習授業

英語

『転入』などの登録手続きの手助け



子どもたちにとって学校は、勉強だけじゃなく日常を取り戻して安心できる場所だからね！これからも『シリア緊急募金』をよろしくね！



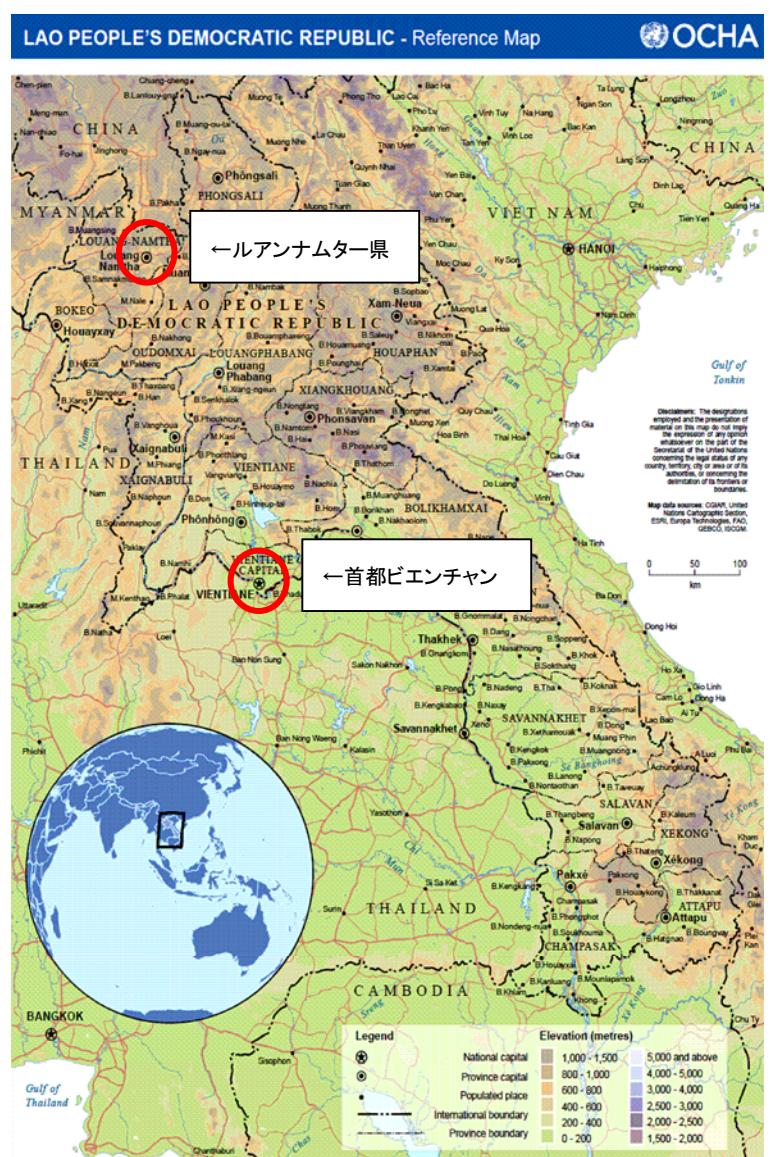
ラオス・スタディーツアー報告 ~日本生協連~

日本生協連関西地連と中四国地連のユニセフ指定募金連絡会に参加する17生協は、ユニセフのラオス指定募金に取り組んでいます。今回のスタディーツアーでは、少数民族が多く住むラオス北部の山岳地ルアンナムター県を訪れて、日本の生協の支援で行われている「女の子と女性の立場の向上プログラム」や、今後支援予定の「初等教育平等化プログラム」などについて視察しました。概要は以下のとおりです。

1. 視察地・視察日程

ラオス（ビエンチャン→ルアンナムター県シン郡とナムター郡）

2月17日(日)
空路、タイ経由でラオスへ
2月18日(月)
午前 ユニセフからの概要説明
2月19日(火)
午前 ナノイ村（学校準備プログラム）
午後 パバー村（初等教育平等化プログラム）
2月20日(水)
午前 ナムデーマイ村（学校準備プログラム）
チョム村（就学前クラス）
午後 シン郡郡長・郡教育局担当者との面会・懇談
2月21日(木)
午前 ナトウイ村（就学前クラス）
午後 若者向けラジオ局・リスナーグループ訪問
2月22日(金)
午前 タワン村の簡易保健センター
2月23日(土)～24日(日)
空路、タイ経由で日本へ



(地図提供：ユニセフ・ラオス事務所)

2. 参加者（敬称略、順不同）

小野田恭子（京都生活協同組合）、杉浦正枝（生活協同組合コープあいち）、矢田部佳子（生活協同組合コープこうべ）、杉本祐美子（生活協同組合パルシステム神奈川ゆめコープ）、岡崎大地（全国大学生活協同組合連合会）、中牟田恵子（埼玉県ユニセフ協会）、岡田祐一（広島県ユニセフ協会）、小池啓子（三重県ユニセフ協会）、西浦雅弘（日本生活協同組合連合会）、今井田枝里（日本ユニセフ協会）、石尾匠（日本ユニセフ協会） 以上 11 名

3. 主な視察先とユニセフ活動の概要

（1）ユニセフからの概要説明

ユニセフ・ラオス事務所で、視察先となるルアンナムター県の概要、ユニセフの活動、ラオスにおける女性と子どもの状況、就学前教育プログラムの実施内容、今後取り組む「初等教育平等化プログラム」などについて説明を受けました。

ラオスは 17 の県からなり約 620 万人、49 の多民族国家からなる、東南アジアでは最貧国の一つです。ルアンナムター県はラオス北部に位置し、人口は約 16 万 3 千人、その約 75% が農業に従事、約 20 の民族が住んでいます。ミャンマー・中国と国境を接し、急速に経済発展をしているにもかかわらず、健康や教育・水など 6 つの事業（プロジェクト）の必要性が残っています。このため、ユニセフではルアンナムター県を重点地域として活動しています。



ユニセフ・ラオス事務所にて

（2）ラオスの就学前教育と初等教育平等化プログラムの必要性

ラオスの就学前教育は主に 3 種類に分類できます。これらの就学前教育を受けた子どもたちは、小学校での成績もよくなります。

プレ・スクール／幼稚園	特に都市部に多く、3~5 歳児が通っています。
就学前クラス	小学校に併設されている 5 歳児向けのクラスです。
コミュニティーに基づいた学校準備プログラム	就学前クラスがなく、ラオ語を母国語としない、遠隔地の 5 歳児向けのフレキシブルな 1 年プログラムです。

ラオスでは小学校への就学率は増加しましたが、留年率と退学率はまだ高い状況です。このため、中等教育に進めるよう「初等教育平等化プログラム」を実施予定で、ルアンナムター県も対象地域になっています。小学校の退学率が高い遠隔地の村を、巡回教員が移動して、小学校 5 年間のカリキュラムの 70% を 3 年間で教えます。各村にはラオ語と現地語を話せる教育アシスタントを置いて、巡回教員を支援します。

(3) 女の子と女性の立場の向上プログラム

① コミュニティーに基づいた学校準備プログラム

ナノイ村

ナノイ村は少数民族のアカ族の村（86世帯・437人）で、コミュニティーに基づいた学校準備プログラムが行われていて、5歳前の子どもたち22人が読み書きを習っています。ラオ語を母語としない少数民族の子どもに、標準語であるラオ語を教える際には絵カードが役立ちますが、絵カード・教科書・ノートが不足しています。



◎日本ユニセフ協会
学校準備プログラムの授業の様子

村長からの村の概要説明によると、教育・健康・衛生教育をユニセフが支援し、食事の前とトイレの後の手洗いを励行させています。子どもたちが教室で学んだことを家族に伝えることで、家族にも衛生教育が行きわたり、村全体への衛生教育の第一歩となります。

【参加者の感想（小野田さん）】

子どもたちはとても楽しそうに、文字カードを見ながら先生に続いて復唱していました。若いボランティアの先生は、希望通りもっと研修を受けられるように支援することで、自信をもって教えることができるようになると思いました。

衛生教育の一環として、トイレや手洗い場を学校に設置することが家族や村全体への衛生教育につながることを聞き、ユニセフのプログラムの重要性を再認識しました。子どもたちが楽しそうに手洗いをしている様子を見れば、このプログラムの成果が徐々に出ていることを確信できます。村全体に衛生教育が行きわたり、各家庭にトイレがあるのが当たり前という時代が来ることを信じて、ゆっくりでも確実に前進していくために、まだまだ継続した支援が必要だと感じました。

ナムデーマイ村

ナムデーマイ村（88家族 66世帯 352人）もアカ族の村です。就学前の学校準備プログラムは村の安全な場所で行われていて、訪問時は、子ども18人（多くは5歳児）と先生2人が、村の長老のお宅の一階スペースでシートの上に輪になって座っていました。はじめは歌を歌い、次に先生がカードを持って文字を教え、次に積み木、さらに粘土と、次から次へと楽しそうなカリキュラムを見せてくれました。



遊びを通して学ぶ子どもたち

1～2年生のための小学校は木造平屋建ての校舎で、トイレと手洗い場がありました。

当日はヤオ族の正月にあたり、先生が帰省してしまったために授業ができず、休校でした。

【参加者の感想（杉本さん）】

前日のアカ族のナノイ村と同じく、別の時代にタイムスリップしたかのような、私たちの日常とはあまりにも違う生活がありました。就学前教育は、民族の言葉と違う言葉を習う第一歩で、少数民族にとって小学校入学前の大切な教育なのだということがわかりました。

村はコミュニティーがしっかりとしていて、助け合いながら生活しており、生活協同組合の原点のようなものを感じました。一方で、若い子がスマートフォンを持っていたり、村長さんもいいカメラを持っていたり、新しい文化が急激に入っています。しっかりと学力をつけ「自分のため、家族のため、村のために、支援が役立ってくれたら」と願います。

②就学前教育クラス

チョム村

ルアンナムターから車で30分程のチョム村（61世帯 79家族 302人）では、就学前教育クラスと小学校（1、2年生のクラス）を見学しました。しっかりとした木造の校舎で就学前教育クラスは土間にゴザ、小学校は机に椅子があります。1997年にドイツ海外事業団（GTZ）が建てた校舎ですが、トイレと手洗い場はありませんでした（村にトイレがあるのは61世帯中10戸のみ）。

就学前教育クラスの2人の先生は小学5年生まで修了し（少数民族の中学校に入りたかったが諦めて）ユニセフの支援で講習を受けて先生になった、とともに15歳の女性でした。

村長は「子どもたちは就学前教育クラスに通って標準語が話せるようになり、勉強ができるようになった」とユニセフの支援に感謝するとともに、手洗い場と子どもの飲み水の支援を求めました。

【参加者の感想（矢田部さん）】

ユニセフのプログラムが子どもたちの勉強の助けとなって希望する教育を受けられるよう、そして、衛生環境が一日も早くよくなるようにユニセフ活動を通して応援していきたいと思いました。

ナトウイ村

ナトウイ小学校には、就学前教育クラスと1年生～5年生の生徒が218人（女の子は105人）、先生が11人（女性は9人）います。民族構成はカム族60%、低地ラオ族とモン族で30%、他にフォ族とフノイ族です。村の子どもは全員来ていますが、遠い子は

2km の距離を通っています。幼稚園や就学前クラスの子は、親が送ってきます。親が亡くなり、畠仕事に雇われるため、学校を辞めなくてはならない子どももいます。

広々とした、しかし草が生えたデコボコの校庭の向こうに、校舎が 3 棟、トイレが 1 棟ありました。就学前クラスは幼稚園と同じ校舎でしっかりとした造りです。子どもたちの作品やポスターが貼られた教室で、子どもたちはゴザに座って歌ったり、カードを使ってゲームのように勉強をしていました。幼稚園と小学校では、子どもたちは机に向かい、先生が熱心に教えていました。

校長先生からは、ユニセフの支援による成果、不足している教材や文房具についての話があり、質疑応答を通して就学前教育の大切さがよくわかりました。



©日本ユニセフ協会
就学前教育の様子

（4）初等教育平等化プログラム

①初等教育平等化プログラムを実施予定のパバー村

パバー村（58 世帯、257 人）の村民が建設した、1 年生～2 年生だけの小学校で、1 人の先生が子ども 29 人（1 年生 18 人、2 年生 11 人）を教えていました。この小学校で 2 年間学んだ後は、徒歩で約 30 分かかる他の村に通学します。4～5 歳の子どもは 31 人いますが、就学前教育のプログラムがないこととラオ語が話せないことで、小学校入学後にスムーズに授業を理解できないことが問題となっています。学校に通っていない子どもも 8 人いました。家の手伝いや父親の死亡が、その理由でした。



パバー村の子どもたち

パバー村では、今後、学校に通っていない少数民族の子どものために先生が巡回指導をする「初等教育平等化プログラム」を実施予定です。このことはまだ村には伝わっていませんでしたが、実施されれば、学校に行けない子どもたちにも勉強の機会が平等に与えられるはずです。

【参加者の感想（杉浦さん）】

「初等教育平等化プログラム」や巡回教員のことは、村の人たちにまだ伝わっていませんでしたが、学校へ行けない子どもたちに平等に勉強できる機会が与えられるためにも、このプログラムの重要性を強く感じました。

このプログラムのもとで 3 年間学んで小学校修了試験に合格すれば、小学校卒業と同じ資格を得ることができ、中等教育に進めます。農業中心の村であるため、繁忙期などを考慮しながら、勉強を行うことができるとても良いプログラムだと思います。

②巡回教員導入に向けての調査

シン郡教育局では、シン郡でのユニセフの支援活動や巡回教員導入に向けての調査の報告を受けました。15の村で調査を行った結果、6~14歳の未就学児童・生徒が、かなりの数存在することがわかりました。

また、①各村に1~5年まで教えられる教師の配置、②仮設ではなく、しっかりとした学校(建物)の建設、③机や椅子など設備の充実、④水や電気の問題解決などについて、村から調査団に要望が寄せられたとのことです。



©日本ユニセフ協会
シン郡教育局の会議室にて

(5) 若者向けラジオ番組の制作

ルアンナムターのTV・ラジオ局は、日本のTV局やラジオ局と比べて施設は立派ではありませんが、必要な機材は揃っています。ラジオ局で「Open Hearts Open Airwaves」(以下「OHOA」という若者向けの番組の制作をおこなっている学生から話を聞きました。

2012年3月から始まった「OHOA」は、男子9人、女子5人の合計14人の学生スタッフが中心に制作している番組(毎週土曜日の朝9:30~10:00放送)で、ルアンナムター県内で35%の聴取率を誇っています。ラオスではテレビがまだ広く普及していないため、ラジオで若者の考えを発信しています。タイムリーなテーマを毎週とり上げ、取材や編集などは学生スタッフが受け持ちます。テーマは、子どもたちからの意見をもとにラジオ局の大人のスタッフが決定しますが、リスナーが今まで最も興味を持ったテーマは、就学前教育など教育に関するテーマだったそうです。

当日対応してくれた3人の学生スタッフは全員高校1年生で、将来は放送関係への就職を希望していました。今後、モン族やカム族といった少数民族に向けて、共用語であるラオ語以外の言葉での放送をしたいと考えています。

ユニセフは、学生スタッフを対象に、インタビュー技術や原稿作成、編集などについて1週間の研修を行い、その後は困ったことがあればアドバイザーとして適宜相談に乗る形で、継続的な支援を実施しています。

【参加者の感想(岡崎さん)】

子どもたちが子どもたちに向けて情報を提供することで、情報を提供する側、される側双方にメリットのあるすばらしい取り組みだと感じました。ユニセフの支援も継



子どもたちがDJを務める

続的に行われているので、今後さらに多くの子どもたちにとって意義のある取り組みになっていくと思います。

このプロジェクトを始めた方から、ラジオ放送を通して「最終的にどんな子どもの姿をめざしているのか」という到達目標を聞く機会がなかったのは残念でした。

(6) 簡易保健センター

①保健衛生指導

小学校の保健室のような部屋に、乳幼児を連れた母親、妊産婦、少女から中年まで、さまざまな女性約40人が少しづつ集まります。

はじめに、ヘルススタッフの女性が母子保健衛生の話をします。ファイルを見せながら、全員に妊娠時の食生活上の注意点を話し、家庭ではなく病院での出産を勧めていました。



保健衛生指導を受ける母親たち

②予防接種・栄養指導・妊産婦検診・家族計画指導

次いで、部屋の中で4つのブースに分かれて検診、診察、予防接種などを実施します。予防接種は医師の立会い・監督のもと、乳幼児や女性に対して実施します。乳幼児はメジャーでの計測も行っていました。栄養指導はヘルススタッフ2人が話しながら、投薬も行うそうです。血圧や体重も測定し、栄養剤のようなものを渡していました。妊産婦検診はカーテンで仕切り、ベッドで診察します。家族計画の指導を行いながら、ピルを1箱ずつ手渡していました。

ラオスからの帰国後、ツアーに参加したメンバーは、スタディーツアーを通して得られた体験をそれぞれの生協やユニセフ県協会で報告し、ユニセフに対する理解を広げる活動をすすめています。

2012年度ラオス・スタディーツアーについては、日本生協連の「CO・OP ユニセフ支援活動サイト」でも概要を紹介しています。ぜひ、ご覧ください。

http://jccu.coop/unicef/report/studytour_laos_2012.html

また、今回のラオス・スタディーツアー報告用DVDは、7月に完成予定です。



京都生協 ユニセフお年玉募金贈呈式・ラオススタディーツアー報告



「世界の子どもたちに希望と笑顔を届けよう 協同の力で！」をテーマに、2012 年度ユニセフお年玉募金贈呈式が 3 月 2 日に開催されました。ラオス名誉領事の大野さんや、日本ユニセフ協会、京都綾部ユニセフ協会の皆さん、ラオス人女性パーノーリットさん、組合員や子どもたち合わせて約 140 人が参加しました。



ラオススタディーツアー報告の様子

《ラオススタディーツアーに参加した小野田恭子さんから》

49 の民族がそれぞれの言葉をもつラオスでは、共通語のラオ語を就学前に覚えておかないと学校の授業についていけなくなり、それが原因で学校に行けない子どもが出てきます。そのため、「初等教育平等化プログラム」の取り組みがとても重要です。

ニーズに基づいておこなわれる、ユニセフの地道で継続的な支援活動は、現地で効果を発揮しています。

会場には、水がめ運びやラオスの民族衣装着用体験コーナーなどが設けられ、子どもたちは自由時間を利用して、スタンプラリー片手にいろいろな体験にチャレンジしました。「ラオ語を書こう！」のコーナーでは、パーノーリットさんと一緒にラオ語を書いたり、「コーブチャイ」（ラオ語でありがとうの意味）の発音を教えてもらったりと、楽しく交流しました。

最後に、子どもたちから日本ユニセフ協会に、募金の目録が贈呈されました。2012 年度のお年玉募金額は 4,295,249 円で、そのうち 300 万円は「ラオス指定募金」として、残り 1,295,249 円は「シリア緊急募金」としてユニセフに贈られました。



募金贈呈の様子



cope mirai* (さいたまエリア)

「ユニセフ・ラブウォーク in 長瀬」「ユニセフ・ラブウォーク in 草加宿」が開催されました



4月29日、埼玉県長瀬町で、さいたま北部ブロック委員会と埼玉県ユニセフ協会の共催で、「ユニセフ・ラブウォーク in 長瀬」が開催されました。子ども 23 人を含む 119 人が、秩父鉄道野上駅から上長瀬広場までの約 4.5 キロメートルのコースを、岩畳などの景勝や、長瀬町認定ボランティアガイドによる歴史や自然のお話を楽しみながら約 2 時間歩き、ゴールではユニセフクイズにも挑戦しました。



ユニセフクイズに挑戦です！

参加者からは「子どもと参加しました。住み慣れた場所ですが、歩いてみるといろいろなことが目に付き、新たな発見も多くありました」「お母さんと友だちと参加しました。歩いて疲れただけど、楽しかったです」などの感想が寄せられ、参加費など 24,600 円をユニセフ募金としてお預かりしました。



桜や史跡など自然や歴史に触れながら散策しました。

3月31日には、さいたま東南ブロック委員会と埼玉県ユニセフ協会が共催し、くらぶ「ライスクッキー」「草加ウォーキング会」「草加宿案内人の会」の協力で「ユニセフ・ラブウォーク in 草加宿」が開催されました。93 人が参加し、埼玉県草加市の毛長川沿いの桜並木など約 5 キロメートルを、「草加宿案内人の会」の皆さんに史跡のガイドもいただきながら歩きました。

参加者からは、「今回で3回目の参加です。毎年コースが変わり、いろいろな場所を知ることができますで楽しく参加させていただいている」などの感想が寄せられ、参加費など 21,611 円をユニセフ募金としてお預かりしました。

ユニセフ・ラブウォークは、"健康づくりのためのウォーキング"と世界の子どもたちのために役立てられる"募金"とを結びつけた取り組みです。参加費がユニセフ募金となるこの取り組みは、1965 年にイギリスで生まれ、日本では 1983 年に始まりました。

※cope mirai：2013 年に、ちばcope、さいたまcope、copeとうきょうが組織合同（合併）してcope miraiになりました。



ユニセフの誕生物語



プロローグ

ひたすらに、子どもたちのために活動をつづけてきたユニセフ。
ユニセフはいつ、どんな人たちが、どんな思いで創ったのでしょうか。
世界に広く親しまれてきたユニセフという呼び名に込められたユニセフ誕生の
物語をお届けします。

★ アンラ ユニセフ UNRRA から UNICEF へ

第二次世界大戦が長期化して行く中で、ヨーロッパの子どもたちは親を失い、傷つき、
飢えや病気に苦しんでいました。そこで“国際連合”は子どもたちを救済するために、
UNRRA (the United Nations Relief and Rehabilitation Administration／国際連合救済
復興機関) の設立を計画し、1943年11月9日、当時連合国側にいた44カ国が加盟
して UNRRA (以下アンラ) が立ち上りました。活動は大戦終結後も続き、1945年
～46年の最盛期には、5万人のスタッフと約40億ドルの救援金をつぎ込んで、東ヨー
ロッパを中心に中国、フィリピン、エチオピアなど25カ国において農業復興、医療・
教育支援、難民保護、子どもの
支援など援助活動を実施しました。

ギリシャー UNRRA からの食糧支援を受ける
笑顔の女の子たち



UNICEF/NYHQ1946-0001/Photographer Unknown

1943
1944
1945

1946

資金のほとんどを米国に依存
する機関でしたが、戦争の勝利
者の慈善的支援でなく、純粋に
国際的協力機関として作られた
もので、支援を受ける国もでき
る範囲で余剰食糧や物資の供出
をするという原則がありました。
こうした資金などの拠出の仕組
みは、国際人道支援といふこれ

までになかったシステムを提示するものだったのです。

ところが 1946 年になると米ソの対立と東西冷戦が始まり、各国の間に溝が生じました。援助を受けていた国が多くが東ヨーロッパを中心とした東側の諸国であるという事情から、最大の拠出国であった米国はアンラの支援は東側を利するもの、と反発。アンラの活動はわずか 3 年で解体の危機をむかえてしましました。

そうした事態の中で、せめて子どもたちにだけでも救援を続けられないかと考えた人がいました。ハーバート・フーバー元米国大統領と、ポーランドのアンラ代表を務めていたルドヴィク・ラフマンです。フーバーは「ヨーロッパを救い、その立て直しを行うのだとすれば、まず、子どもたちに援助の手を差し伸べねばならない」と世界に訴え、ラフマンはアンラ最後の会議で、子どもたちに対する食料・医療援助活動を継続するために、新しい国連機関を作ることを提案しました。これが ^{ユニセフ} UNICEF (以下ユニセフ) の原型となり、この功績が、彼がユニセフの創設者といわれる由縁です。

★ 当初のユニセフ

東西冷戦の状況下では、どのような国際機関もその影響を受けざるを得ないことはアンラの例をみても一目瞭然でしたが、地道な政治的駆け引きの努力が実り、1946 年 12 月 11 日の国連総会においてアンラの残余資金とスタッフを引き継ぐ形でユニセフ (the United Nations International Children's Emergency Fund / 国際連合国際児童緊急基金) の設立が満場一致で採択されました。事務局長に就任したモーリス・ペイトは、どの国の干渉も受けずにもっとも支援を必要としている子どもに支援を届けることを約束しました。しかし、それは 3 年間だけの緊急的な活動をする目的の機関でした。

予定された 3 年間の活動期間が終わりに近づいた 1950 年 10 月 6 日の国連総会は、アンラの終焉の時と同じような状況がきました。「ユニセフはすでに任務を終えた」として資金の拠出を停止したい考えを表明した米国の国連代表エレノア・ルーズベルト (フラ

チエコスロバキア UNRRA の救援物資の到着
米国イリノイ州から運ばれた孵化用の卵 6 万個



©UNICEF/NYHQ1946-0005/Photographer Unknown

ンクリン・ルーズベルト元米国大統領の夫人)に対し、会議の副議長をしていたパキスタン国連大使アハメド・シャーボカリが、反論の弁を展開しました。「同じように支援を必要としている開発途上国の子どもたちには援助の手を差し伸べてくれないのでですか」と。

この演説はアジア・中南米・中東の代表等からも大きな賛同を呼び、米国はその意志を翻しました。この年の12月、国連総会は、ユニセフの任務を3年間延長すること、活動を開発途上国の支援に拡大すること、およびユニセフの恒久的な機関化を検討すること、を全会一致で決議しました。

★ 現在のユニセフへ

その3年後、再度ユニセフの存続が問われたとき、その重要性を訴えたのはほかならぬユニセフ支援者となったエレノア・ルーズベルトでした。1953年10月6日、国連総会は満場一致でユニセフを恒久機関とすることを決定しました。名称を United Nations Children's Fund／国際連合児童基金と改め、世界の子どもたちを支援する機関として緊急援助だけではなく、子どもの生存と健やかな発達を支える社会開発援助を行うこととなりました。

名称から「国際」と「緊急」の言葉は外れましたがユニセフという略称は広く親しまれていたので残すことになりました。そしてこれ以降、ユニセフの存在意義が問われることは二度とありませんでした。

エピローグ

多発する世界の問題の向こうには、いつも、いまにもかき消されてしまいそうな子どもたちがいます。

子どもの権利を擁護する主要な機関であるユニセフは今、中期事業計画(2006年～2013年)の中で国連ミレニアム開発目標の達成(約束の期限は2015年)を他の国連機関や国際社会とともに目指しています。

21世紀のユニセフの物語は始まっています。

参考資料：Teachers'Network 通信 No.17



ユニセフの誕生物語

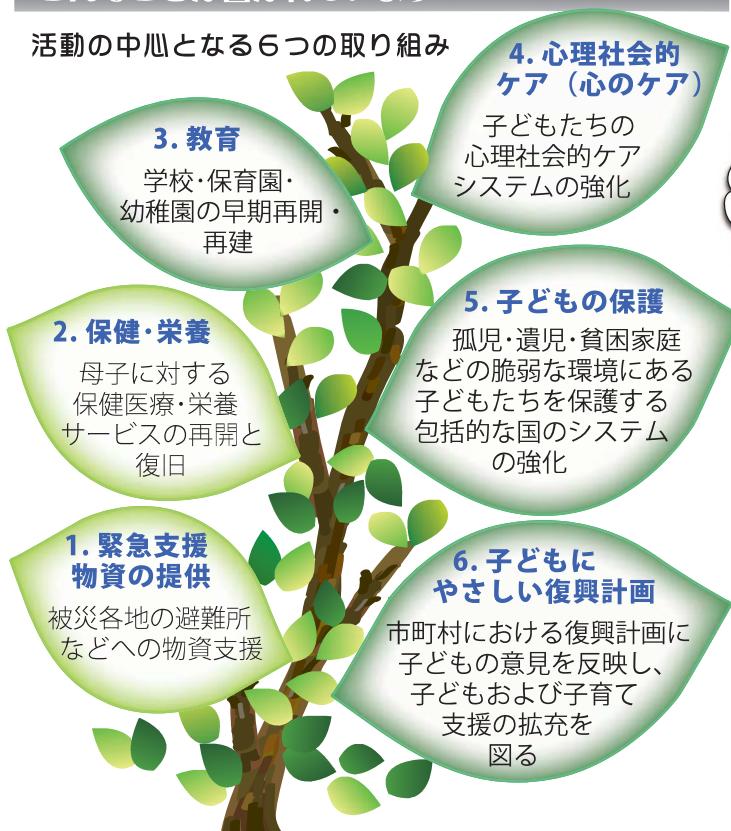
もうご覧になりましたか？

『東日本大震災 緊急・復興支援活動－2年レポート』

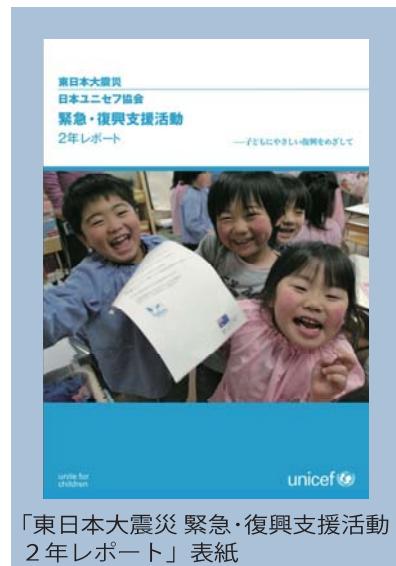
「あらゆる自然災害で、最も困難な状況におかれてしまうのは子どもたち」というユニセフ本部の緊急時対応指針。その指針にのっとり、ユニセフ本部から託される形で日本ユニセフ協会は、震災発生直後から多くの企業・団体などの協力を得て緊急・復興支援活動を続けています。その活動も2年の月日がたちました。多くの人々に支えられてきた活動の様子や収支報告を冊子としてまとめたものが『東日本大震災 緊急・復興支援活動2年レポート』です。

こんなことが書かれています

活動の中心となる6つの取り組み



『東日本大震災 緊急・復興支援活動2年レポート』は日本ユニセフ協会ホームページでもご覧いただけます。
www.unicef.or.jp/kinkyu/japan/pdf/2_year_report.pdf



「東日本大震災 緊急・復興支援活動
2年レポート」表紙

ありがとうございました！

総額
47億9280万4748円

募金受付終了のお知らせ

ユニセフ「東日本大震災緊急募金」の受付は、2013年3月31日をもって終了いたしました。

お預かりした募金は、総額47億9280万4748円（2013年3月31日現在）にのぼります。

日本ユニセフ協会では、現在も「心理社会的支援、子どもの保護支援、子どもの参画による復興計画づくり支援」の3分野を中心とした支援を続けています。

みなさまからの「東日本大震災緊急募金」は、今後数年間に渡って継続するこれらの活動に全額活用されます。

2012年度ユニセフ募金集計報告

全国の生協が組合員に協力を呼びかけて集約された2012年度のユニセフ募金は、一般募金、緊急募金、指定募金を合わせて、約1億8千万円となりました。全国の生協の募金額集計を開始した1983年からの累計総額は、約74億8千万円となりました。ご協力ありがとうございました。

2012年度の一般募金は約7,900万円でした。指定募金は、コーパスネット事業連合やユーロコーパス事業連合の牛乳(コーパス商品)の購入を通じた募金、地域ごとに取り組まれているラオス、ネパール、ブルータン、モルディブへの募金、CO・OP コアノンロールの購入を通じたアンゴラへの募金などで、約9,400万円が寄せられました。

全国の生協のユニセフ募金内訳(2012年度・2011年度)

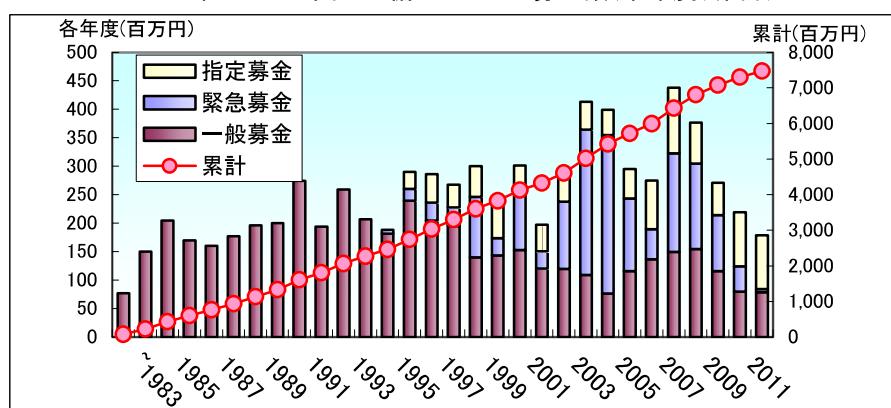
募金種別		2012年度	2011年度
① 一般募金計		78,751,510	79,479,643
指定募金	ネパール女性と子どものための地域開発 ^{※1}	12,308,068	23,424,710
	ラオス初等教育平等化(2012)/女の子と女性の立場の向上(2011)	19,375,885	19,170,010
	モザンビーク栄養プログラム	20,641,651	18,684,430
	マラウイ教育支援プロジェクト	4,295,397	4,664,694
	モルディブ栄養と環境改善	16,671,694	10,306,118
	ブルータン水と衛生	11,720,563	9,302,231
	アンゴラ教育	9,128,901	9,607,697
	ブルキナファソ衛生 ^{※2}	2,672	15,699
	マダガスカル水と衛生 ^{※2}	—	9,896
緊急募金	マリ水と衛生 ^{※3}	11,494	—
	② 指定募金計	94,156,325	95,185,485
	東日本大震災緊急	553,121	9,188,946
	ソマリア干ばつ緊急(アフリカ緊急募金を含む)	80,000	32,715,205
	アフリカ干ばつ緊急	987,533	1,388,998
	シリア緊急	3,627,730	—
	自然災害	517,517	1,035,736
	中東・北アフリカ緊急	—	504,244
	アフガニスタン人道支援	—	1,818
③ 緊急募金計		5,765,901	44,887,358
総合計(①+②+③)		178,673,736	219,552,486

※1 生協の送金時期の関係で、当該数値になっています。

※2 生協だけでなく一般にも公開されている分野・地域指定募金です。

※3 ダノンウォーターズオブジャパン社が取り組むVolvic 1L for 10Lプログラムを通じたマリの水と衛生プロジェクトへの、大学生協東海事業連合による協力分です。

1983年からの全国の生協のユニセフ募金額(単年度、累計)



※1983年～1994年までの募金種別内訳は不明

ぼむ・ぼむ広場

編集後記

- ◆ ひと昔ほど前に、ユニセフができた頃の話を書いたことがあります。改めて読み返すと、ユニセフの設立に関わった当時の人々の思いがじんわりと伝わり、もう一度書いてみたくなりました。少し手を加えましたが「ユニセフの誕生物語」、皆さまの感想をぜひお聞かせください。
- ◆ 4月7日に予定されていたユニセフ・ラブウォーク中央大会は、大荒れの天気になるということで中止になりました。参加を楽しみにされていた方々も多く、本当に残念！31回目の今年は、この6月に横浜で開催された「第五回アフリカ開発会議(TICAD V)」にあわせ、港区・渋谷区にあるアフリカ各国の大使館を巡るユニークな2つのコースが用意されました。事前にコースの下見をした時も、強風に悩まされたそうです。
- ◆ はじめまして。今回から『ぼむぼむ通信』の編集を担当させていただくことになりました、日本生協連の阿久根慶彦と申します。この4月に入協したばかりの社会人1年生です。今回で『ぼむぼむ通信』はNo.60(還暦)を迎えるので、私は孫のようなものですね。最初の仕事として、この『ぼむぼむ通信』の編集作業に関わることを嬉しく思います。精一杯頑張りますのでどうぞよろしくお願ひします。

ユニセフ*コープネットワーク
ぼむ・ぼむ通信
No.60 2013年6月14日発行
編集 グループ ぼむ・ぼむ
スタッフ／編集／小池・土橋・浜崎・松本・山本
石尾・中村・阿久根
イラスト／蛇沢

発行 日本生協連 組合員活動部
〒150-8913
東京都渋谷区渋谷3-29-8 コーププラザ 11F
TEL03-5778-8124 FAX03-5778-8125
ホームページ <http://jccu.coop/unicef/>

○次号は、2013年9月13日発行予定です。

ぼむ・ぼむ通信・ひとことカード

今回の「ぼむ・ぼむ通信」はいかがでしたか？ご感想やご意見・ご要望をお寄せください。次号以降の参考にさせていただきます。

生協名：

氏名（ペンネーム可）： 《組合員・役職員・その他》

ご協力、ありがとうございました！

右記の宛先までお送りください。 宛先：日本生協連 組合員活動部 FAX：03-5778-8125

MAIL：kumikatsu@jccu.coop